

1 研究課題

社会のあり方が大きく変化していくと言われている。それに伴い、学校を含めた子どもたちを取り巻く環境の変化は、想像をはるかに超える速さで進んでいる。これまでに人類が経験したことの無い急激な変化の中、子どもたちは社会に出て、その担い手となっていかなければならない。

小学校学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）では、キャリア教育の充実を図ることが明示された。同じ趣旨の内容は中学校学習指導要領にもあり、これからの社会を担う子どもたちの育成におけるキャリア教育が果たす役割は大きいと言える。

以上のことを踏まえ本部会では「生きる力とキャリア教育のかかわりを明らかにする」ことに重点をおき、今年度も本主題を設定した。

千葉市教育センターの夏季研修で、実践を市内の先生方に周知し、市全体のキャリア教育の充実を図り、理解を深めた。また、キャリア教育関東甲信越地区大会に参加し、千葉市のキャリア教育の取組や推進の方針について発信し他県市部での取組を学び得た。

加えて、児童が登校してから下校するまでの全教育活動の中から、キャリア発達を促すことのできる場面や声かけを精選し、リーフレットにまとめて千葉市でのキャリア教育の推進を図った。

2 課題解明の方策

(1) 千葉市教育センター夏季専門研修講座

8 月 22 日（月）に行われた同研修講座において「キャリア教育の実践Ⅰ」の講座を展開した。

内容は「やってみようキャリア教育」を副題に、以下のような講義や実践報告、また参加者

に課題を考えてもらうなどした。

①講義「キャリア教育とは」

（花見川第三小 稲生 明尚教諭）

②実践報告「PDCA サイクルとキャリア教育」

（越智小 桂嶽 大介教諭）

③実践報告「しっかりキャリアについて」

（真砂西小 高篠 真由美教諭）

④実践報告「ちょこっとキャリアについて」

（真砂西小 吉田 聖史教諭）

⑤実践報告「中学校の教科でできる実践」

（稲毛中 長谷川 雅子教諭）

代読（土気南小 岡本 美咲教諭）

(2) キャリア教育関東甲信越地区大会

11 月 12 日（土）の第 48 回関東甲信越地区中学校進路指導研究協議会東京大会に参加した。小谷小学校の吉野真史教諭の実践をまとめ、他県市部へ提案した。

(3) キャリア教育リーフレットの作成

児童が登校してから下校するまでの全教育活動の中で、キャリア発達を促すことのできる場面を精選し、リーフレットにまとめた。

3 実践の概要

(1) 夏季専門研修会での講座内容

①「キャリア教育とは」

講座参加者を対象に、キャリア教育が求められている背景や、計画し実践していく方法について説明した。アンケートを使った実態把握の方法や、全教育活動から「キャリア教育の宝」を見つける方法など、参加者に実践をしてもらいながら解説した。

②「PDCA サイクルとキャリア教育」

P（計画）D（実践）C（評価）A（改善）サイクルでのキャリア教育の実践を報告した。下の 4 つを柱とした実践で、児童の変容を見取った。

- ・テストに向けての取組
- ・体育学習における PDCA サイクル
- ・日常生活の中での取組
- ・学級活動「レベルアップチャレンジ」

実践を通して、「課題対応能力」の高まりが見られた。

③「しっかりキャリアについて」

しっかりキャリアとは、教科等の目標や活動内容とキャリア教育で育成する能力を関連付けて指導するものである。真砂西小で1年生の生活科「かぞくはなかよし〜かぞくぽかぽか大きくせん〜」の実践を紹介した。学習の過程だけでなく、児童から上がった意見や、身に付いた力についても報告した。特に、キャリア教育を通して育てたい基礎的・汎用的能力について、それぞれの能力が、どの指導場面でどのように高まったかを説明した。

④「ちょこっとキャリアについて」

ちょこっとキャリアとは、教科等の目標や活動内容の中に潜んでいるキャリア教育の価値を見出し、意識して指導していくものである。全教育活動の中に、ちょこっとキャリアの視点をもつことで、児童の基礎的・汎用的能力を高められることを報告した。特に係活動では、児童に自分の得意なことから活動を考えさせるなど、少しの工夫で学級が活性化し、児童の成長を促すことができることを説明した。

⑤「中学校の教科でできる実践」

中学校の教科学習の中にも、キャリア教育を取り入れられることを紹介した。教科は数学で、「しっかりキャリア」としては定期テストの振り返りレポートで「ちょこっとキャリア」としては毎時間の授業の振り返りで行った。実践を通して、基礎的・汎用的能力が高まるだけでなく、生徒の主体的に学ぶ態度を育むことができた。

(2) キャリア教育関東甲信越地区大会

吉野教諭は、千葉市の「ちょこっとキャリア」として、日常生活や特別活動での様々な取組を通じ、学級や学年の自己有用感を高めた。また

「しっかりキャリア」として、6年生の総合的な学習の時間「こやつサステナブルプロジェクト」で休止されていた学校行事を児童、保護会、地域、校長・教頭など学校全体とのつながりを意識させて企画、運営させることで児童の自己有用感を高めた。それらをまとめ、他市県部へ提案した。

児童の自己有用感を高めるために、他者とのつながりを意識する活動が効果的であったことが児童の変容から見取ることができた。

(3) キャリア教育リーフレットの作成

日常的な教育活動の中にある「生きる力」を育む機会を、市内で共有しキャリア教育を推進することをねらいとしてリーフレットの作成を行った。児童が登校してから下校するまでの全教育活動の中で、キャリア教育につながる場面を精選した。また、行動の判断の主体が子どもになるような声かけを考案してまとめた。より具体的で活用しやすいリーフレットにまとめることができた。

4 本年度の成果と問題点

(1) 成果

夏季専門研修会を中心に、本部会の活動や研究内容を報告することにより、キャリア教育についての理解が深まった。

また、キャリア教育リーフレットの企画・作成を通じ、日常的にキャリア教育の具体的な実践事例を確認できた。

(2) 課題

キャリア教育リーフレットを配付するだけではなく、多くの教員に実践、活用してもらえるように、活用方法や効果について検証し、発信し続けていく必要がある。

(文責 蘇我小 青木 真也)

キャリア教育

1. 千葉県教育研究会進路指導研究部会 夏季研修会

会 場 東金市立東金中学校

講 義 「千葉市におけるキャリア教育の取組」

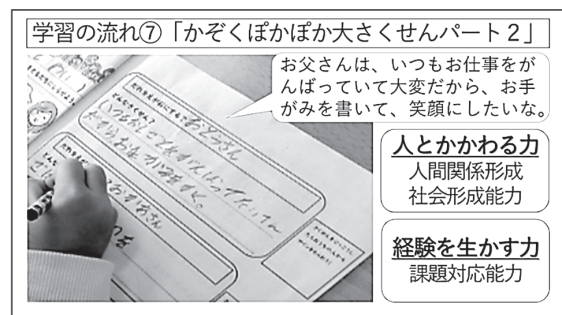
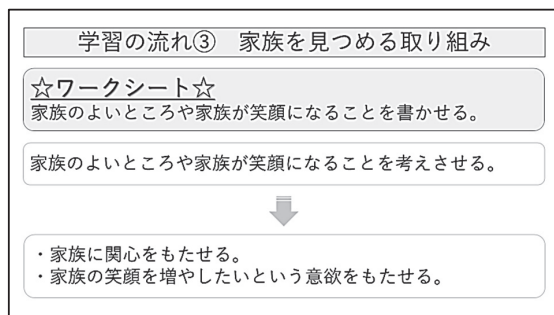
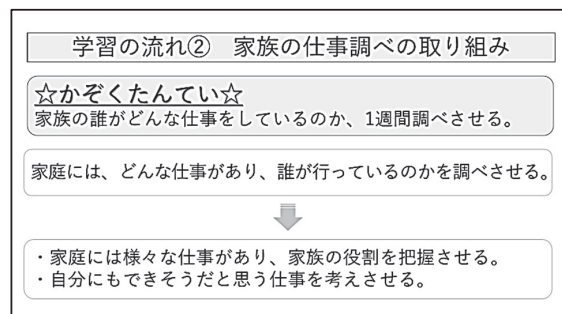
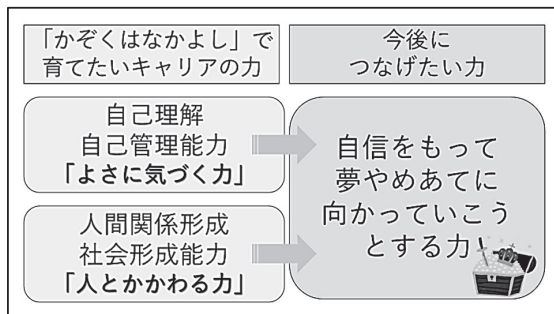
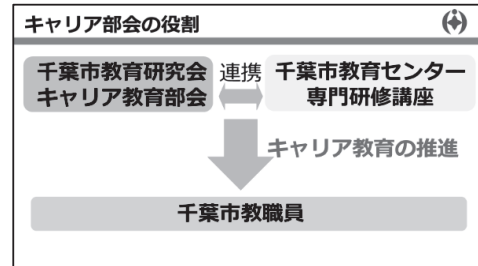
発表者 小谷小 吉野 真史 先生

真砂西小 高篠 真由美 先生 真砂西小 吉田 聖史 先生

2. 講義内容（一部抜粋）

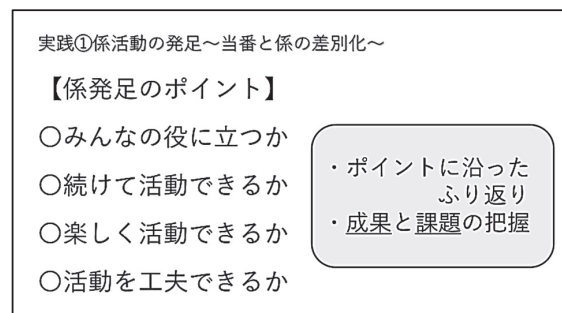
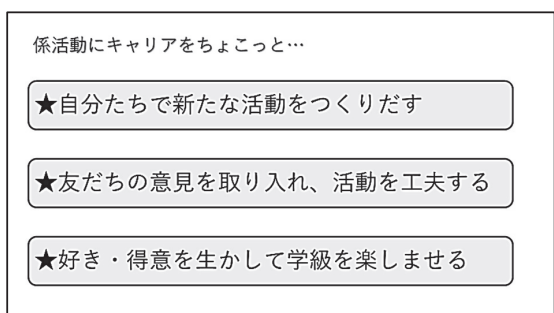
＜「かぞくぽかぽか大さくせん」 高篠 真由美 先生＞

第一学年を対象に生活科「かぞくはなかよし」の単元において、キャリア教育で育てる基礎的汎用的能力の「自己理解・自己管理能力」と「人間関係形成・社会形成能力」を育てることをねらいとした「しっかりキャリア」の実践である。家族とのつながりや家族のために自分にできることなどについて見つけ、考えを深めることができた。



＜「日々の実践の中に『ちょこっとキャリア』の視点を」 真砂西小 吉田 聖史 先生＞

係活動をよりよい活動にするために、係の発足や振り返りを工夫することで、キャリア教育で育てる基礎的汎用的能力の向上をねらいとした「ちょこっとキャリア」の実践である。ギガタブを用いた係の振り返りやアンケートの活用をしたことで、係活動を活性化することができた。



安全教育

(小・中学校)

自分の身は自分で守る力を育てる(危険予測能力・危険回避能力の育成)

1 研究課題

当部会では、児童生徒の危険予測能力や危険回避能力を育てるために、実践的な安全教育の推進に力を入れている。学校現場では、懸念される首都直下地震をはじめとする大地震に対応するために改訂された「学校防災マニュアル」に基づき、防災教育の充実を図っていることから、当部会においても「防災教育の推進」を重点目標として活動している。

例年、当部会では防災教育、防犯教育をテーマに授業を実践している。最近では、特別活動や朝学習の時間に、映像資料やカードゲームなどを活用して、「誰でもできる安全教育」として、授業実践してきた。しかし、話し合い活動が伴うため、コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、3年ほど実践を止めている。今後は、また新たな授業を考案して実践していきたいと考えている。

また、各施設に足を運び、「安全」の考え方や取り組み方を学ぶ研修に力を入れている。さらに本部会の活動を充実させるために、千葉県教育研究会安全教育部会と積極的に連携を図り、今年度も共催での事業を3回実施した。本部会の会員だけでなく、安全教育を推進するために、県内の安全指導主任に研修に参加していただいた。

さらに、当部会では最新の安全教育の情報を得るために、講師を招いて教育講演会を行っている。

2 課題解明の方策

(1) 講話・情報交換による研修

あやめ台小にて、各学校の活動計画、実践的な安全教育の情報交換や、近年の災害、犯罪、事故などから学校に求められる安全教育について研修を行った。また、防犯、防災、交通安全

において、最新の情報を得るために、今年度の視察研修先について話し合い、今年度の活動計画について話し合った。

(2) 授業研究

近年は、生活安全、災害安全における危機予測能力、危険回避能力を高めさせることを目標に授業実践している。コロナウイルスの対策が緩和されていることから、次年度は授業研究会を開催したい。

(3) 視察研修

① 千葉県庁危機管理課

危機管理課の県内の安全への取組について

② そなエリア東京

東京直下 72 h TOUR に参加

③ 千葉市中央消防署 臨港出張所

臨港出張所の取組について

(4) 教育講演会

千葉市防災対策課 市政出前講座

講話「地域の防災対策について」

月	内 容	会 場
4	研究計画の確立	あやめ台小
5	情報交換 視察研修先の検討	あやめ台小
⑥	視察研修①(施設見学・講話) 。千葉県庁 危機管理課 講話「危機管理課が考える防災について」 「危機管理課と市、各自治体との連携」	千葉県庁 危機管理課
⑧	視察研修②(施設見学・講話) 防災体験学習 そなエリア東京 東京直下 72 h TOUR	そなエリア 東京
9	防災巻 目黒巻 実践	
10	教育講演会① 千葉市防災対策課 市政出前講座 講話「地域の防災対策について」	誉田公民館
⑪	視察研修③ 千葉市中央消防署 臨港出張所 「臨港出張所が考える安全について」	千葉市中央 消防署 臨港出張所
1	研究のまとめ	千葉市科学館 きぼーる

※ 上記の月の□は、千教研安全教育部会との共催事業

3 実践の概要

(1) 視察研修

① 千葉県庁危機管理課

危機管理課では、県が考えている防災について講話をいただいた。過去の災害について振り返り、県内の災害において、危機管理課では、どのような災害応急活動をしているかについて理解を深めた。また、情報通信管理室の見学では、防災情報、震度情報など、あらゆる災害を瞬時に察知できるようなシステムが数多く設置されていた。そこでは、大規模な災害が発生したときに予想される通信の途絶などがあっても、防災対策無線で、県と市町村等が連携できることがわかった。それに伴い、学校現場等では、災害時の対応が滞ることがないように、無線機の動作確認等は、これまで以上に注意深く点検していく必要があることを認識した。

② そなエリア東京

防災体験学習「東京直下 72hTOUR」に参加した。千葉県安全教育部会との共催であったため、県内の先生方も参加された。

首都直下型の大地震が発生したときに想定される街の状況を、フロアいっぱいに展示していた。コンビニエンスストアの陳列棚や、家具を固定していない家の被害状況など、地震の対策をしていない場合に起こり得る状況を目の当たりにすることができた。学校においても、同様の被害があると考えするため、固定器具の見直しや、新しい機材等の設置には安全面に留意していく必要がある。

また、東日本大震災の被害者による、災害から得た知識や、避難所で活用できる身近にあるものなども紹介していた。いざというときに生かせることを習得でき、充実した研修となった。

③ 千葉市中央消防署臨港出張所

千葉港に位置した臨港出張所では、大型の消防車、消防用の船等、他の消防署ではなかなか見られないものを見学することができた。近年では、マンションの増加に伴い、は

しご車の梯子の長さが追い付かないことから、消防用のヘリコプターを活用しているなど、現代に沿った消火方法について理解を深めた。また、消防隊は命を懸けての仕事のため、消火時の行動一つ一つの掛け声において、はっきり大きくしなければならないという話をいただいた。学校現場においても、実際に火災等が起きた場合は、誰が何をしたかを全体で共有しなければ大事故につながる可能性がある。訓練等において見直しを図っていくことが大切である。

(2) 教育講演会

誉田公民館に千葉市防災対策課の方を招き、市政出前講座「地域の防災対策について」をテーマとして講話をいただいた。教員向けにアレンジした話だったため、非常に興味深い内容であった。首都直下型の地震の話の中では、東京湾で大地震が発生した場合、シミュレーションすると、10 mクラスの大津波が来ても千葉県と神奈川県が形状がよい効果として働き、千葉市沿岸部には大きくても3 m程度に収まることを知った。また、それよりも高潮のほうが危険であり、4 mを超えるため、美浜地区が浸水被害にあうとのことであった。津波訓練においては、より高いところへ逃げるといった学校の多いが、このような数値を示していただけたことで、避難場所の選択肢を広げられるのではないかと考える。

4 本年度の成果と問題点

今年度は、視察研修と教育講演会のみで、授業研究会を開催することができなかった。ただし、得られたものはどれも最新で、有益なものであり、学校現場に活用できるものである。今後も視察研修、教育講演会、授業研究会を通して、安全について多くのことを研修していきたい。また、安全教育を学校現場に浸透させていくために、視察研修等の誘い掛けもこれまで通り行っていく。

(文責 西の谷小学校 月野木 諭)

学 校 事 務 (小・中学校)	「カリキュラム・マネジメントと事務職員の関わり」 ～スタッフ・マネジメントの研究～
----------------------------------	--

1 研究課題

近年、グローバル化や情報化が進み、AI等の技術も目覚ましく進歩している。教育現場を取り巻く課題が複雑化・多様化する中、学校がチームとなり組織力を発揮することが求められている。

そのような社会の急激な変化を受け、新学習指導要領では「課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育む」ことが強調されている。そこで、本部会では、千葉市の目指すべき子どもの姿「夢と思いやりの心を持ち、チャレンジする子ども」の具現化に向け、事務職員が教職員と連携・協働し組織力を発揮することで、教育活動の充実につながっていくと考えた。子どもたちの成長をサポートするために、学校全体を見渡し、課題に気づき、身近な業務改善をチームとして積極的に取り組むための方策を模索したいと考え、「カリキュラム・マネジメントと事務職員の関わり」を研究主題と設定した。

2 課題解決の方策

各学校はカリキュラム・マネジメントを通して、それぞれの特色や課題、地域の違いを踏まえて教育課程を創り、教育活動を実践していく。事務職員は業務改善を通じ、その活動に関わっていく。

学校事務部会では、令和3年度から3年間の中期研究計画（参画型）を立案した。

1年次	タイム・マネジメント
2年次	スタッフ・マネジメント
3年次	財務マネジメント

今年度は中期研究計画の2年次で、スタッフ・マネジメントの研究を行った。学校の課題をみつけ、解決策を模索し目指す学校の姿に近づけていく。事務職員のことだけでなく、校内の教

職員や外部機関等も含めた人材を有効活用できるような仕組みを考え、働き方を最適化できるようにすることで、目指す学校の姿に繋げていけるのではないかと考え、スタッフ・マネジメントに重点を置き研究を行った。

3 実践の概要

○4月例会（オンライン）

今年度の学校事務部会の研究計画提案

○5月例会（オンライン）

・今年度の研究の進め方について「スタッフ・マネジメント」の説明と資料配布。今後の取り組みについて

・市教研と研究会の連携について

○6月例会（オンライン）

・スタッフ・マネジメントについて具体的に考えるため、はじめに会員の中から3名の方に、課題解決シートの作成について発表してもらった。他校の情報を学び、改善策を考え、各自の検討資料とした。その後、課題解決シートの「現状」と「解決すべき課題」を書き出し、「解決策」について検討し作成を行った。

・「教育参画と学校財務」について

○8月例会（オンライン・グループ協議）

6月例会で各自作成した課題解決シートについて、オンライン上でグループ協議を行った。各自で作成し、解決したい課題に何を設定し、どのような解決策を考えたのか協議した。

・事務職員研究会のあゆみと活動

○9月例会（オンライン講義）

講義 「コンプライアンスについて」

講師 教育職員課コンプライアンス班
管理主事 池内哲夫 様

教職員の不祥事を防ぐためのコンプライアンスについて

1 体罰・暴言・不適切な指導について

2 子どもの権利について

3 性暴力防止の取組み

の3点について実際の相談件数等を挙げて講義を行った。安心安全な学校づくりをめざすため、不祥事の事例等を学び、人材育成の1つコンプライアンス（特に服務）の重要性をご講義いただいた。

○10月例会（オンライン）

- ・6月例会に続き、3名の方にシートを完成させるまでの経緯などを発表してもらい、各自の課題解決シート作成の参考とした。
- ・課題解決シートの「解決のための具体的なマネジメントプラン（いつ・誰が・何をする）」について個人ワークを行った。課題解決のために事務職員、学校の職員、外部機関とさまざまな人たちとの関わりの必要性和課題解決に向けどのように繋げていくか検討した。

○11月例会（オンライン・グループ協議）

- ・各自作成した課題解決シートの作成等について発表し、また、意見交換も行い課題解決シート完成に向けてグループ協議を行った。昨年度同様オンラインでのグループ協議を2回行ったが、スムーズに取り組むことができた。

4 本年度の成果と課題

（1）成果

コロナ禍によって各種研修がオンラインでの実施がメインになり、原則が1校に1人の職種であるため、非常に閉鎖的な環境のなか各自で日々業務を進めることが必要となった。

4月例会から感染症対策もあり、この1年間対面での研究をすることができなかった。そのような状況下で、どのような方法で研究を推進していくかを検討したことで、オンラインを利用した研究や、協議の方法を上手く活用することができたのではないかと考える。

本年度は6月例会・10月例会に各自の課題と向き合い、8月例会・11月例会にグループ協議を行い、自分の取り組みを発表、他の会員の意見を取り入れる機会を設けることで、自校の課題解決に繋げていくことができた。今年度の研

究テーマ「スタッフ・マネジメント」をとおして学校全体の課題解決に幅広い視点から取り組み、業務の効率化につなげていける機会となったのではないかと考える。

各月の例会をオンラインで行ったことは、感染症対策としての観点や、会場への移動負担がないことなど会員からの評価が高かった。

（2）課題

コロナ禍の状況下で実践できることを考え、オンラインでの取り組みで研究を少しずつ推進することができたが、本来想定していた程度の成果はあがっていないのではないかと考えている。講義はオンラインを有効に活用できたが、グループ協議では、自由に発言ができる環境ではないため、会員の意見を多く引き出すことができなかったためである。GIGAスクール構想に沿った活用方法も探りながら進めてきたが、まだまだ改善の余地があるように感じる。

これからも、学校全体を見渡し、課題に気づき、業務改善を通して教職員、子どもたちの学びに寄与する方法を模索していきたい。

（文責）小中台南小 石田真梨子

貝塚中 佐久間未来

登戸小 山口 翔

学 校 事 務

1. 全体研究 6～8・11月例会について

実施方法 Zoom によるオンライン開催

内 容 「カリキュラム・マネジメントと事務職員の関わり」

～スタッフ・マネジメントの研究～

2. 研究内容設定の理由

学校事務部会では、千葉市教育研究会の研究重点「子どもの豊かな学びにつながる職務内容の明確化と効率的な管理・運営」を受けて、研究テーマ「カリキュラム・マネジメントと事務職員の関わり」を主題としました。

社会の急激な変化を受け、新学習指導要領では「課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育む」ことが強調されています。そこで、本部会では、千葉市の目指すべき子どもの姿「夢としたいやりの心を持ち、チャレンジする子ども」の具現化に向け、事務職員が教職員・学校間連携のメンバーや、地域・教育委員会等と連携・協働することで、教育活動の充実につながっていくと考えました。

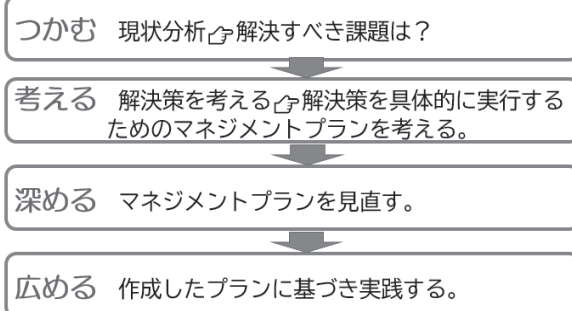
昨年度の「タイム・マネジメント」に引き続き、子どもたちの成長をサポートするために、学校全体を見渡して課題に気付き、解決する力を養うため、事務職員の立場からできる取り組みについて、中期研究計画の2年次として、研究内容を「スタッフ・マネジメントの研究」に設定しました。

3. 研究内容（一部抜粋）

「スタッフ・マネジメント」とは人的資源管理や人材の管理という意味で、「人材を有効活用するための仕組みを体系的に構築・運用する」ことを指しています。国立教育政策研究所の藤原文雄先生は、「人材育成」について「個々の意欲・能力を高めることに加え、しくみを作ったり、つながりを創ったりすることも含む」と定義されています。「目指す学校の姿」と「現状」のギャップを埋めるために「解決すべき課題」を整理し、「解決策」に至るためのマネジメントプランを設計するため「課題解決シート」の作成を行いました。

「スタッフ・マネジメント」について以下の流れで行いました。

学校マネジメントプランの流れ



4. まとめ

6・10月例会では、自校の解決すべき課題等に向き合い、8・11月例会ではグループ協議を行い、自校の取り組みを発表し合い、他会員の意見を取り入れる機会を設け、課題解決につなげていくことができました。「スタッフ・マネジメント」をとおして、学校全体の課題解決に幅広い視点から取り組み、業務の効率化につなげていける機会になったと考えられます。

1. 全体研修会 9月例会について

実施方法 Zoom によるオンライン開催
講 義 「コンプライアンスについて」
講 師 千葉市教育委員会 教育総務部 教育職員課
コンプライアンス班 管理主事 池内 哲夫 様



2. 講義設定の理由

今日、学校を取り巻く環境は急速に変化し、児童・生徒、保護者、地域との対応も多種多様になっています。学校においては、組織やチームワークによる職務遂行が強調され、すべての教職員が情報を共有し、理解をして、子どもの心に寄り添う支援ができるような体制を整えて行く必要があります。学校事務職員においても、学校に勤務する職員として、知識を身に付け、理解を深め、適切に対応するためには、どのように関わっていったらよいのか。安心安全な学校づくりをめざし、人材育成のひとつであるコンプライアンスの重要性の意識を高めるため、本講義を設定しました。不祥事の事例等から学ぶことで、安心安全な学校づくりに活用することを目指しました。

3. 研究（講義）内容（一部抜粋）

①コンプライアンスについて

「体罰・暴言・不適切な指導について」、「子どもの権利について」、「性暴力防止の取り組みについて」の3点について、ニコニコサポートや教育職員課に寄せられた件数や実際の相談内容を確認しました。一旦不祥事が発生すると、教職員に対する社会の信頼を大きく揺るがすものになり、児童生徒が関係する不祥事では、子どもたちの人権を侵害し、保護者や児童生徒、地域との信頼関係が壊れることになります。懲戒処分の対象として国家賠償上の賠償責任を負うことも考えられます。

②不祥事の主な原因について

不祥事の主な原因として、「教育公務員として誇りやモラルの欠如によるもの」、「知識不足等に伴うもの」、「組織的な体制に伴うもの」が挙げられます。千葉市の教育目標として「人間の教育を基調とし、自ら考え・自ら学び・自ら行動できる力を育む」と掲げられており、期待される教師像として「豊かな人権感覚を身に付けた教師」、「コンプライアンス意識の高い教師」が求められています。

③不祥事を防ぐために

- ・暴言や体罰、行き過ぎた指導はいかなる理由があっても許されないという気持ちを持つ。
 - ・感情的になってしまった時はアンガーマネジメントを実行する。
 - ・教職員の「安全配慮義務」という法的義務があり、頭の片隅に入れて置き意識する。
 - ・保護者や児童生徒間のいじめなどの校内トラブルは「初期対応と組織的な対応の徹底」が重要。
- 不祥事防止として対応に迷ったときは、「子どもの権利」を考えてみる。「守るべき子どもの権利は何か」、「子どもの『最善の利益』は何か」を考えて行動することが大切。

4. まとめ

コンプライアンスについて、業者への支払い遅延や守秘義務違反、交通事故の報告義務違反など、事務職員の立場でも起こり得ることなので、より注意をして職務遂行に努めようと意識が高まりました。教職員の多岐にわたる仕事の中で、どこか「他人事」として捉えてしまいがちな不祥事を防止することはとても難しいですが、事例を紹介してもらったことにより「不祥事は誰の身にも起こり得ること」と知り、教職員一人一人が意識をもって職務に当たらなければならないことを再確認しました。学校がひとつの組織として対応を徹底するためにも人材の育成・有効活用が重要になってくると思います。

（文責）貝塚中学校 佐久間 未来

生徒指導 (小・中学校)	社会性、連帯性のある児童・生徒の育成 —魅力ある学校・学級づくりを通して—
---	---

1. 研究課題

(1) 現代社会が求めている人間像から

- ・知識の多少や暗記する力だけでなく、自ら学ぶ意欲やその場に応じた的確な判断力、柔軟な思考力、表現力が求められている。
- ・目標に向かって見通しのある計画性と継続的で積極的な実践力（実行力）が求められている。

(2) 現代の児童・生徒の傾向から

- ・急激な社会の変化と複雑化に伴い、児童・生徒の価値観、生活様式が多様化している。
- ・小集団では協調性があるが、集団として一つの目標に向かって行動しようとする気持ちに乏しい。
- ・友達の重要性は感じているものの、よりよい人間関係を築くことは苦手である。
- ・教師の指示や規制が少なく、自分たちの手で企画、運営できるものについては楽しいと感じている。
- ・人格の発達課題を十分に達成していない面がある。また、表情が乏しく、感情を読み取りにくい児童・生徒が多い。
- ・情報化社会が進む中、インターネットやスマートフォンへの依存やトラブル等が問題視されている。
- ・コロナ禍において、他者との関わりが希薄になっている。

(3) 機能としての生徒指導のあるべき姿から

- ・学校生活への適応や自らの能力を最大限に発揮して充実感や成就感を得ることができるよう支援をする。
- ・学校生活における人間関係を望ましいものとするための支援をする。
- ・物事を適切に判断し、実行しようとする意欲を育てるための支援をする。
- ・児童・生徒の発達段階における人格形成の

支援をする。

- ・将来への展望の不安の解消、自己有用感を伸長するための支援をする。

(4) 目指す子ども像

○個人として（個の確立）

- ・基本的な生活様式の身についた児童・生徒
- ・集団の一員であることに満足できる児童・生徒
- ・目標に向かって進んで計画・実行できる児童・生徒

○思いやりのある児童・生徒

- ・自己表現のできる児童・生徒

○集団として（班、学級、各会）

- ・目的意識をもった集団
- ・学び合い、支え合える集団
- ・助け合える集団
- ・励まし合い、規制し合える集団
- ・児童・生徒の特徴を生かせる集団

2. 課題説明の方策

個を生かした教育活動を進めていけば、魅力ある学校生活になるであろう。

○個を生かす

- ・一人一人を大切にしている。
- ・個のよさ、特長を生かしている。
- ・互いの人格を認め合っている。

○魅力ある学校

- ・子ども同士の人間関係が望ましい方向に育っている。
- ・学習に適した環境を整えてある。
- ・子どもの実態に即した学年、学級経営がなされている。
- ・魅力ある行事が組まれている。（児童・生徒による企画や運営）

児童・生徒が意欲をもって取り組むような
集団活動の場を設定していけば社会性、連帯
性が高まるであろう。

○集団活動の場

- ・学校全体の行事
- ・移動教室等の学年活動
- ・学級における日常の学習全般や学級生活全
般のグループ活動

3. 実践の概要

4月〈自己紹介・研究計画検討・役員選出〉

- 4月初めの学校や学級について情報交換

5月〈事例検討〉

- 学級担任、生徒指導主任、それぞれの立場
で悩んでいることの事例の検討
- ・いじめ認知に関わる児童・生徒の報告につ
いて
- ・荒れている学級への関わり方（生徒指導主
任、学年の生徒指導担当として）
- ・不登校児童への対応について

6月〈事例検討〉

- 学級経営や生徒指導で困ったこと、悩んで
いること、先生方に聞きたいことについて
情報交換・事例検討
- ・トランスジェンダーの児童への対応につ
いて。（児童・保護者それぞれへの対応）
- ・外部機関とのつなぎ方
- ・教育相談・生徒指導・不登校事案へのケー
ス会議のもち方について

8月〈施設見学〉

市教育センターグループ活動施設見学及び説明

- 不登校児童・生徒へのアプローチの仕方や、
各施設へのつなぎ方
- ・市養護教育センターや市教育センターをは
じめ、各種施設の紹介と不登校児童・生徒
をつなぐ方法について研修
- ・不登校について
- ・教育相談班各事業について
- ・不登校パッケージについて

9月〈事例検討〉

- 夏休み明けの児童・生徒の様子について
- ・コロナ禍での児童・生徒のストレス解消に
ついて
- ・不登校気味な児童・生徒について
- ・教職員の生徒指導の資質向上について
- ・不登校児童・生徒に対して個別の支援と全
体の指導の必要性。周囲の児童・生徒に対
して理解と協力について
- ・児童・生徒が変われば保護者も変わる。信
頼関係を構築する保護者対応について

10月〈施設見学〉

ライトポート中央施設見学及び説明

- 施設の概要と不登校児童・生徒の活動につ
いて
- ・施設の概要について
- ・利用する児童・生徒の経緯等について
- ・利用する児童・生徒の具体的な活動について

11月〈授業研究〉

「社会性、連帯性のある児童・生徒の育成」
ー魅力ある学校・学級づくりを通してー
単元名「ティーボール ～ベースボール型～」
(体育科)

授業者 千葉市立土気南小学校 教諭

岡 健太郎 先生

- ・ティーボールの学習において、児童の特徴・
特性に合わせた配慮・支援を行い、それぞ
れの児童のよさが引き出せる支援を行った。

1月〈年間のまとめ〉

- 研究のまとめ・次年度の要望等の検討

4. 本年度の成果と問題点

各学校が抱えている不登校や児童・生徒・保
護者とのトラブル等切実な問題について望まし
い生徒指導のあり方を考えることができた。部
会も若年層の教員が増え、事例について具体的
に、丁寧に話し合うようにしている。実践的な
児童理解、人間関係づくりについて有意義な研
修を行うことができた。

(文責 生浜小 小田嶋 弘樹)

生徒指導（小学校5年）

1 授業の実況 授業校 千葉市立土気南小学校 指導者 岡 健太郎

(1) 教科領域 体育科

(2) 単元名 「ティーボール ～ベースボール型～」

2 単元について

(1) 単元観

○打つこと、捕ること、投げること、走ることなど多くの技能を求められる運動である。

○2つのチームが攻守を規則的に交代して、ティーに乗せたボールをバットで打ち、ベースを回って得点したり、アウトサークルに素早くボールを運んで相手の得点を防いだりして、勝敗を競うことが楽しい運動である。

○経験によって技能差も大きい、ルールや作戦を工夫しボールを捕ってアウトにしたり、ボールを打って得点したりして楽しめる運動である。

(2) 指導観

児童は運動に取り組む意欲は高いが、ベースボール型ゲームに対する興味・関心が低い。理由として、ベースボール型ゲームにおける運動技能の未習得（投げる、打つ、捕る）が大きい。そこで、それぞれの運動技能を高めたり、ルールや場の設定に配慮したりすることで、意欲的に学習に取り組めるようにしたい。まず、投げる活動では、必要な技能のポイントを明確にし、段階的に指導していくことで、正しい動作を習得することができると考えた。また、打つ活動では、ドッジビー練習を行い、腰の動きを意識させた後、「構えてバッティング」や「ノックバッティング」を補助運動として取り組み、打てる爽快感を味わえるようにしたい。捕る活動では、掲示資料を見て、キャッチボールやノックバッティングのときに意識して捕球姿勢や手の形をつかませるとともに、アウト板を設けることで、捕球することが苦手だと感じている児童でも捕球する役割に挑戦でき、相手に点を取られることを防ぐ楽しさを味わうことができると考える。このように、正しい動作を習得し、思い通りに運動することができれば、学習への意欲向上につながると考える。

ベースボール型ゲームは複雑で、理解するのが難しい傾向がある。ルールを簡易化することにより、全ての児童が安心して学習に取り組めるようにしたい。思いきり打ちながら点を取れることの楽しさや、捕球することが苦手だと感じている児童でも捕球する役割に挑戦し、相手に点を取られることを防ぐ楽しさを味わえるようにしたい。

ルールの例 攻撃：何回ファールしてもアウトにならない。 打った後、バットはコーンの中に入れる。
守備：守備側がアウトゾーンに投げて円の中で捕るかアウト板に当てればアウト。

また、チーム競技という特性を生かし、グループによる高め合う、支え合う言動を活発に行えるようにしていきたい。そこで、学級活動の時間に構成的グループエンカウンター「わが班は〇〇である」を行う。自分たちのグループをこんなチームにしたいという願いを出し合い、それをグループのよさとして決めておくことで、チームの仲間意識を高めることができるようにしたい。その中には、「失敗を責めない」「点が取れたら明るい声をかけ合う」など、前向きな願いが共通理解として挙がるだろう。チームで協力してできるようになる喜びや達成感を味わうことで、さらに意欲が高まっていくと考える。

これまでに児童は、全校で行った「命を守る集会」でリフレーミングについて考えたり、移動教室の宿泊班では、今回扱う構成的グループカウンター「わが班は〇〇である」に取り組んだり、自身の性格や言動、集団の中での振る舞い方について考えてきた。このティーボール（ベースボール型）の学習の中で、既に感じている体育の楽しさをさらに味わえるようにするには、技能面だけではなく、チーム競技だからこその連帯感を高めることが大切だろうと考える。「わが班は〇〇である」に加え、毎時間最後にワークシートに書く「今日のMVP」を帰りの会で担任が紹介するなど、児童の励みになる集団活動の場を設定したい。そうすることで、この単元の学習を通して、チーム内の社会性・連帯感の高まりにつなげ、学級の親和的な集団作りに役立てていきたい。

(1) 本時の目標

【思考力、判断力、表現力等】

【学びに向かう力、人間性等】

[illegible]

幼 年 教 育	子ども一人一人の社会性を育てる集団活動を、どう深め広げていくか。
---	---

1. 研究課題

小一プロブレムや中一ギャップが話題になって久しい。様々な手だてがとられてはいるものの、入学時だけでなく、数年を経過しても学校生活に悩む子どもたちがいる。

友だちとのかかわり、人とかかわりについて、様々な場面で体験をしながら身に付けていくということがうまくできないことが原因と考えられる。

体験が少ないのではないか。また、身に付けた力を発揮する場面がないのではないか。学校でできることは何だろうと考え、本主題を設定し研究を進めてきた。

2. 課題解明の方策

- 学習のねらいを達成するための方法として、ペア、グループ活動を学習に取り入れる。
- 子どもたちの実態をもとに、工夫したペア活動、グループ活動を設定する。
- 活動中の様子や、活動後の様子をみて、次の指導に取り入れる。

3. 実践の概要

①事前の話し合いの重視

部会の度に、現在の学級の実態と対応について話し合った。それをもとに活動にどう取り入れ、どんな成果が得られたか、子どもがどう変容したかについて振り返った。毎日の学習の中で、どの場面で、どう検証できるか。めあては、子どもの考える道すじは、どんなタイミングでどう発問するか、確認して実践した。

②検証

○小学校 中学年 「役割を分担して」

ねらい：よりよい学級づくりのためには、それぞれ役割を分担し、互いに協力し合い活動を進める大切さに気付く。

学級を運営する当番活動に加え、「よりよい学級づくり」を共通の目標とした係活動を設定した。

子どもたちは、自ら考えた5つの係活動で、リーダーを中心に相談しながら役割を分担して進めていた。友だちと、意見や考えの相違がありトラブルになることもあったが、話し合いをして自分の気持ちを伝え、誤解を解くことができた。また、各係がイベント活動を実施したことで、自分のがんばったところや友だちのよいところを発見することができた。振り返りの活動では、友だちにアンケートをとるなどよりよい活動につなげる取組ができた。

よりよいクラスをつくるために

- ・日常的な運営に関わる「当番活動」。
- ・学級をよりよくする「係活動」。
- 子どもたちで係活動を設立した。目標を決め、今後の活動計画を立てた。



活動を開始する

- ・イベント活動の計画・実施、その他の掲示物（係の新聞、呼びかけのポスター）などの作成等活動を実施した。



相手意識が芽生える

- ・活動後にアンケートを実施して、友だちの意見を今後の活動に反映させた。
- ・感想発表で友だちの活動を称賛し、自分の活動にも生かそうとした。

役割分担をする

- ・一人一人が主体的に活動できるように役割を分担して活動を進めるようになった。

友だちの長所探し（11月）

- ・後期になり、友だちのよさがわかってきた段階で、よさを伝えて互いを認め合う場を設定した。



なりたい自分になるために（11月）

- ・あこがれの6年生になるためには、これからどのようなことをしていけばよいかを考え、具体的なめあてをたてた。

○小学校 高学年 「考えて行動しよう」

ねらい：自発的、主体的に行動する児童を育成する。

一人一人が活躍できるような具体的な手だてで、互いを認め合う手だてを考えることで、元々もっている自己のよさや可能性を認識し、具体的な場で力を発揮できるようになると考えた。クラス遊びを計画させたり、友だちの長所探しを行ったりする中で、お互いのよさに気付くことが多くなったようだ。

また、憧れの6年生になるために、具体的なめあてをたてたことで、自分で決めたことに対して主体的に行動する姿が見られた。

お互いを知るクラス遊び（通年）

- ・クラス替えをした子どもたちが、クラス遊びの中で、新しい友だちとかかわりを増やすことで打ち解け、お互いのよさに気付くことができる機会を設けた。



当番活動と、係活動

- ・一人一役の「当番活動」、自分たちで工夫して作り上げていく「係活動」を通して、一人一人が活躍できる場を増やした。



4. 本年度の成果と課題

○相談することで役割分担が進んだ。

⇒自分の意欲が向上したと気付いた子が増えた。

○子どもどうしの関わりが深まった。

○それぞれ互いに認め合ったり励まし合ったりしている場面が多く見られた。

○コミュニケーションが広がり深まった。

○子どもどうしで話し合いをさせたりすることで、いろいろな言い方を知ることができて、理解も深まった。

○友だちが準備してくれたことで楽しめた、と思った子どもたちは、今度は自分たちがみんなを楽しませるような活動を考えるようになった。

○教材開発や、「かかわりにおける成長を支援すること」「考えを知らせ合うこと・認め合うこと」「励ましや賞賛をすること」の検証をすることができた。

●どの活動でも意見の違いはあった。よく話し合い、互いの考えを理解しあうよう支援することを続けたい。

●今後 ICT 活用についても、実践例を増やしていきたいと考えている。

（文責 磯辺小 光永多恵子）

幼年教育（小学校4年）

1 実践の実際

よりよいクラスをつくるために

【4月】

- 学級の日常的な運営に関わる「当番活動」と「学級をよりよくするため」に構成される「係活動」について説明する。
- 学級に必要な係を学級で決める。その際、同時に係のリーダーを立候補制で決める。係のメンバーも決める。
- 各係で、係活動の目標を決める。また、今後の活動計画を立て、役割分担をする。

【5月～7月】

- 各係は、イベント活動の計画・実施、その他掲示物（係の新聞、呼びかけのポスター）などの作成等活動を実施した。

相手意識が芽生えてきた

【イベント実施前】

- アンケート作成→友だちのニーズをつかもうとした。
- 新聞、告知ポスターの掲示→係の活動やお知らせなどを友だちに発信した。
わかりやすいレイアウトなどを考えた。
- イベント活動などで参加賞などの景品を手作りで作成
→友だちに喜んでもらえるような内容を考えた。

【イベント実施後】

- 活動後のアンケートを実施する係も見られた（図書）
→友だちの意見を今後の活動に反映させようとした。
- 感想発表で、友だちの活動を称賛し、自分の活動にも生かそうとした。

役割分担をして

- 活動を計画する際に、役割分担をさせた。
「一人一役」の精神→活動内容によって、早く終わってしまう子どもがいたり、意見が合わなかったりする場面が見られたりした。その際には、互いの意見を聞き合わせながら確認させたり、もう少し先の計画まで見通しをもたせたりする支援を心がけた。

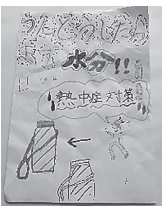
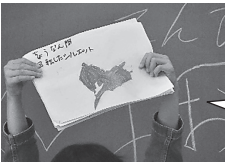
活動時間について

- 原則として、学級活動の時間。
- 係によっては、休み時間や空きの時間、家庭に持ち帰って活動する子どももいた。
- 人数の多い係では、集まって活動する約束が全員に伝わっていない時があり、活動が進まない場面が見られた。
- 活動に関する話し合いは、必ず全員集まった時に確認する。
「だれが何をいつまでにやるのか」ということを取り決めることをふり返りを行うことで、気づかせた。

前期後半の実践に向けて

【9月】

- 時間的に制約はあるが、「前期が終わるまでにもう一つ活動しよう」という目標をもち、それに向けて各係は活動を行った。
- 係によってはコラボイベントを計画した。
→それぞれの係活動の進捗を見ながら、実施できるように声かけをした。

係名	活動内容	活動の様子等
体育係	ドッジボール大会 クイズ 	企業理念（めあて） スポーツが好きな人も嫌いな人も楽しめるような企画を作っていきたい。 ○どうやったら見やすくなるかな。 ○この景品いいね。
保健係	保健新聞 保健についてのクイズ 熱中症の呼びかけ 係からのお知らせ イベント活動	企業理念（めあて） みんなの健康を大切にしたい。 
図書係	読み聞かせ 好きな本の調査 リクエストボックス 	企業理念（めあて） 半年間で、みんなに本を好きになってもらえるように頑張る。 ○どんな本がいいか調べよう。（ギガタブ）
お絵かき係	シルエットクイズ 好きなキャラクターアンケート 景品作り	企業理念（めあて） みんなと絵をかくて、楽しい時間を過ごす。 
お助け係	学級遊び（ぎょうざ大会） ※ぎょうざ…赤白帽子を折りたたんだ形のこと。 学級ポスト ポスター作成	企業理念（めあて） みんなのお助けや、楽しいイベントを開きたい。 
環境係	アンケート 新聞作成 他の係とのコラボイベント （ぎょうざ大会）	企業理念（めあて） みんなが楽しくなる環境を作りたい。 ○話し合いによって役割分担をし、活動を進めた。 ○もめ事もなく、協力して進められた。

2. 成果と課題

- それぞれ互いに認め合ったり励まし合ったりしている場面が多く見られた。
- 子どもどうして話し合いをさせることで、いろいろな言い方を知ることができ、理解も深まった。相談することで、役割分担が進み、自分の意欲が向上したと気付いた子が増えた。
- 友だちが準備してくれたことで楽しめた、と思った子どもたちは、今度は自分たちがみんなを楽しませるような活動を考えるようになった。
- どの活動でも意見の違いはあった。互いを理解し合えるよう支援することを続けたい。